〔シュプリンガー・フェアラーク東京、東京都文京区本郷三―三七―三、電話〇三―三八一二―〇三三一、A五判、xi、三四一ページ、一九九一年七月三〇日発行、定価二〇〇〇円〕

宗田　一著『**渡来薬の文化誌**』

医学史・薬学史の権威である宗田一氏がこのほど『渡来薬の文化史』と題する書物を東京の八坂書房から刊行された。著者が十数年にわたって『医療ジャーナル』誌に連載された論考の中で、近世日本に輸入されて洋薬に関する論著をまとめられたものである。十六世紀から十九世紀に至る間の渡来薬を通じてみた日本の文化史、社会史を達意の筆で綴られたもので、とりわけ書簡や触書などの一次資料を豊富に使用することによって現実感をもりたてている。

たとえばコロンブス一行によってアメリカからもたらされた梅毒が十五世紀以後ヨーロッパで流行した時のポックホウト、水銀剤、さらに中国、日本で開発されたシナ根こと土茯苓などの使用された経緯が詳細に記されている。

また幕末の安政五年（一八五八）にコレラが大流行した折の幕府の触書が紹介されているが、貴重な一次資料というべきであろう。この折に幕府が推奨した薬の一つに芳香散というものがあった。これは桂枝、益知、乾姜から成る内服薬と、芥子泥、饂飩粉から成る外用薬であり、これらに関する考察がなされている。

また本書には稀覯本である『遠西名物考』なる書物が紹介されている。これは宇田川玄随の著書であり、しばしば類似名である『遠西医方名物考』と混同されるという。後者は宇田川玄真・榕庵の著書として広く知られており、筆者もしばしば参考にさせていただいているが、『遠西名物考』なる書物については恥しいことだがこれまで知らなかった。宗田氏によると『遠西名物考』は宇田川玄随の著書『西説内科選要』に収載されている薬物の解説のために編集されたものであるという。

一方、宇田川玄真・榕庵共著の『遠西医方名物考』は宇田川玄真・榕庵共著の『増補重訂西説内科選要』に対応する薬物書であるという。そんなわけで、きわめて稀覯本に属する『遠西名物考』が紹介される意義はきわめて大きい。

そして、巻末には享和三年（一八〇三）に著わされた中島真兵衛の『舶来諸産解説七拾条』が載せられている。これも当時の洋薬に関する貴重な資料というべきであろう。

（大塚　恭男）

〔八坂書房・東京都千代田区猿楽町一―五―三・電話〇三―三二九三―七九七五、一九九三年発行、A五判、三三四頁、三二〇〇円〕

小林健二・宮川浩也編『**素問・霊枢　総索引**』

『素問』と『霊枢』が中国系伝統医学のもっとも重要な古典